



歎  
髻  
虫  
物  
語

三



13  
1298  
9



へ13  
1298  
3

嫩髻蛇物語卷之三

江戸 全亭主人戯編



第五回

妹背の相語

朧夜の月影

且説又鎌倉郷なる。藥店張六と呼ぶ商人も。元末京師の産物や一が。  
前年元久の頃より。此鎌倉お末や住く藥舖を設け活業をこころい。  
ある。元久四年の夏の比。彼巨蛇の軀を贖ひ得く。吾が家お拵返り。是炎  
天お曝さんとき。巨蛇が腹を引裂くる。其が咽喉のわたりより。甚大さなる  
珠出くる。其色珊瑚の如く。赫々たる光のまばら張六打見く。是たのま。

蛇物語卷三

世の驪龍の玉を。吾聞疾者驪龍の玉を嘗て百病頓ふ愈とら。幸ひ吾が家小賣弘め。龍骨丸の家製あり其が茶の坩納く。貯へ置る尚さうか驗のうんと彼玉を採て。薬と共に秘藏を。巨蛇丸目標して世小賣弘め試る。誰のやとく張六が龍骨丸のむり。長血の病の驗のりと誰の是とよけのほど近曾より賣弘め。巨蛇丸の妙なる夏屋を百病小驗のる名法ありと。谷七郷小言觸し。後と都へも聞えりて薬と買ふ者門前小市をかして集ひけ。張六のまぬ蛇が軀を得て不意も家富栄えけ。此程又京師より織出せる絹布を此鎌倉小呼取。其とも三々買ひけ。尚の手代小數多抱へ弥繁昌く。斯て八九年の星霜を経り。彼張六が妻の碓辺と呼び。娘一人を拵り。

其名と荏草と号び。器量骨柄世小秀く。殊更父母小仕の事究く。孝のりけ。張六夫婦の掌中の玉と愛美く。云月けが。頻く十六歳の春の成ぬ。願くも容美く。才の聳を撰み。娘小取合せ家と継せんと。探り需き。面貌美廉け。意放蕩。意貞実か。容醜。才の薄情。切る思鈍り。左右容と意と兼備。人の無世ありけ。智も定め。張六憶小彼從者。免七の姿容艶く。志の忠直。殊更悟。性質るれば渠を以て娘小嫁合せ。夫婦密小語らひ合せ。娘荏草小言。荏草の兼て。免七が姿貌の甚優美く。貞實る音小愛く。何怜婦人と生。斯る艶夫と夫と。将来俱小相語。未頼母小兒事。

世の驪龍の玉

二

春情自蛇念の赤繩を引



と心のよめ浮岩のまこと。従  
来貞實性質るまゝ色あを出  
さぐ忍びぬるふ今父母不是問  
まご。嬉しき心まご胸裏に俯向  
ふ散かる紅葉袋を結ひ着  
手巾の端啗へけ。思ひを合ひ口  
紅粉心の色を知らさける夫婦  
も其と悟りけまご。まご手代の  
免七と招きまご子細を物語まご。  
光景をまご寛七も不中まごぬ

稲舟の涉を得つる噂々もまご。ど  
古郷不在も父母の意も何も辨へ  
ぬ。畏まごの答まごの宜まごの  
忝まご自採て上もる身の幸  
あつたまごの吾父母の意のい  
計知まご後まごえまご上も左も右も  
任せまご答へ奉らんと。まご夫  
婦も理まご。日と撰る事由と  
審小文小書認め。六浦の郷小言送  
まご。六浦の表太史。あは張六



大福帳  
金銀出帳  
忠實煩悩子  
丹圓

免七

言ひあはしはる文と見ま。妻ぬも是と物語の儲けあはる自今へ主の  
 君の家も絶果仕へる君が不在さる先年より武士の業も棄てあはる  
 責む五子商人とありて樂しく住せんとき。斯もあつる事るまは彼張  
 六が望ふ任せ五子を渠あ得せんとき。あはれいふと話説が妻は尚更張六も  
 富むる家とせむるまはげふ其工を己等が力種とも成るるといふ表太の本来  
 さへ頼み此由計らんとき。鎌倉の郷る張六が家あ入来りて。あはれいふ  
 話説まは張六夫婦打悦び善の速の諺とき。直小吉日良辰を撰ま。先  
 聘物を取入。親族と呼集ひて。祝義の酒を宴交しぬ頃も弥生の  
 始るまは櫻ざめとき物忌ませ世の諺とも争ひぬ。来る四月の十五日佳日  
 とせむは婚姻の日と定め千代萬代と約するの用きけり。且説張

六が家あ年々弥生の始頃と去年の暮仕込の荷とき京師より送る  
 ちこそし。絹布の荷の價の代と手代等の三四人宛代る。都あ登せて  
 贈らるる。今年の幸ひ免七と婿と定め下心ぬ渠も俱ふ京師あ  
 上とせ。彼地の光景もあはる。彼婚姻の時節も暫時日敷の間さへ  
 わりとき。張六さる言扱ひ贈る沙金の荷物あ調。踏費各懐ふ用意  
 せむる。免七と手代等五人を連させ荷物兩具と擔をて下男一人  
 と従へり。頃も三月の始つて京とて旅する。此者等あ総て二十歳と  
 一二歳越え。年嵩とせる壯人等も何れも男もあはる。意の駒の  
 鞭を緩へ自が隨意々戲言の程か。箱根の山路あかり。嶮岨さ路も杜き  
 輩の生ぬ泥ま。越ゆる。頼む箱根の権現の御垣の下ふ詣と着ぬあはる

七の五三三

四

暫一額突々。爰や彼所と見ゆぐらひく。其より此處と立出く。一個のへく  
 此より。彼西の河原と云呼處より。山深く入りぬ。種々の地獄と呼名  
 せる所在と云。いさゝか折節。尋ね見んと。各是と古郷。返  
 りて。語やごごも成ぬべし。いさゝか打連は。徑の方へ入りぬ。  
 ゆる路。路の終ひけん。九二里。あまのりも。未のつらん。と云ふ。峨々。巖の  
 從母。中道の。辛うと。越えゆ。又十町。余り。ゆる。ゆる。と廣ら  
 ぐる。地。向方。松林の。森々。と生茂。ゆる。中。滑る。路。はさ  
 しく。其處。入り。口。見ゆ。古び。る。碑。を。彫る。又。字。を  
 清ゆ。ん。分。後。と。透。入。不。憚。入。葦。酒。山。門。と。記。せ。る。各。う。ら。ん。そ  
 い。る。禪。室。の。有。らん。異。様。る。碑。銘。の。り。と。く。近。く。至。り。ゆる。向。方。大。なる

樓門のり地獄寺と記し。金字の彫る額懸まり。皆々仰見く。寺号も  
 又異様ありと。叫さ合つ入りくる。境内いと廣らふして。正面の本堂  
 のり。瑠璃光佛と安置せり。各々拜す。境内と彼所。此處見ゆぐらひて。鐘  
 樓の下。凡懸て。項も。稍。爛漫。と。咲。乱。と。花。と。か。く。暫。時。憩。ひ。て。居  
 る。ゆる。庫。裡。の。方。より。一。個。の。小。和。尚。と。出。る。と。旅。客。衆。の。是。か。入。り。て。憩。ひ  
 ぬ。と。い。ひ。ら。本。堂。の。戸。と。閉。ま。り。招。き。け。る。と。各。打。連。其。処。入。り。  
 疲。と。休。め。ぬ。り。け。ふ。和。尚。と。覺。え。僧。の。出。來。り。と。人。々。何。処。の。何。處  
 へ。過。り。ぬ。と。同。く。各。答。り。と。僕。等。ハ。鎌。倉。の。商。人。ゆ。い。が。此。度。伊。豆  
 箱。根。の。両。社。へ。詣。奉。ら。る。と。爰。を。過。る。大。なる。此。の。り。る。地。獄。と。云  
 呼。ぶ。見。ゆ。ぐ。ら。い。と。爰。入。り。入。り。不。意。の。御。寺。小。詣。で。ゆ。り。幸。ふ

恵まふ預りゆひと。いそ和尚の打聞。さそ神詣。い人々るのや。さ  
 を聞ふゆへに旅の有りか。此處の地獄といふ種々る所有て怪有  
 の事ども。都く吾寺の預る境ると。案内せさせし。且幸るぬ。  
 吾寺。春秋の二季。例年七日。無禮構との事。行ふり。けや。其  
 縁の目る。誰と。此所。往來の人々等。隣邊りの壯人等。貴さ  
 賤さ。別かく。皆聚會。酒肴好める物と。並居。郷食。心と。を例ある。ふ  
 率や。此方。集ひ。寄打。屈る。酒一盃。吞。必。其。壯き。人々。よ  
 寺院と。心遣ひ。何。足踏。伸。或。立。舞。打  
 倒。酒。生。根。と。乱。句。合。踊。無。禮。構。と。呼。去。来。や  
 と。袖。知。縁。と。免。七。等。の。始。の。不。審。慮。ひ。ぬ。

一。只。願。和。尚。の。切。甚。年。壯。者。等。固。辭。人。詞。の  
 さ。鄙。人。め。た。と。さ。入。と。と。免。七。等。の。中。小。忌。を  
 異。和。尚。が。詞。と。甚。不。審。く。人。々。と。渡。止。ま。皆。々。の。さ。の。と  
 小。詞。と。辞。ま。ん。其。報。ひ。せん。物。と。惜。む。と。の。口。惜。し。郷。食。心。と  
 流。石。小。免。七。も。強。て。も  
 止。め。得。さ。る。遠。の。俱。率。の。彼。客。堂。入。り。集。ひ。各。等。座。と  
 連。ぬ。和。尚。大。さ。打。悦。び。壯。僧。等。と。衆。共。言。捫。ひ。つ。出。九。五。合  
 大。盤。の。奥。津。鯛。の。尺。わ。り。鮮。さ。ふ  
 又。種。々。の。魚。等。と。並。居。て。ぞ。擔。ひ。出。せ。る。皆。々。打。驚。き。斯。る。寒。く。死

山中ふかく鮮けき魚どものいふてえ得もの。と不審を和尚聞て打  
 笑ひつゝ宿人の心狭くも宜ふものか。思僧が寺の八宗研学酒や肴を扱置て  
 婦人も厭ふ自が宗体門碑ふ記をてんぬのすや。寺のこのり此のり。杜き  
 同士の寄合場所十里二十里隔り。其処や此処やの浦廻り。漁る魚を賑  
 へる。鎌倉さうく夜通し。荷ひ出まてく街道を過るとはけの群を居る。  
 壯人との買取。手々小爰の持来り。其を肴酒宴すと云魚の事と  
 欠てる。心置る。飲ぬ。酒杯と乾く中ゆの年長と。かんぬる  
 男かさけき。元来好める酒とせむ。飲ぬ前。咽笛と打鳴り。笑ひ合み。  
 ひと波々と受。其色恰も琥珀の如く。光の光。油等。濃き  
 酒あり。是ま。旅の道ま。杉林の下み。一椀づを酌り。水の如き。

淡き酒薬の如きの苦き酒尿のど。此の臭き酒を飲る口味ひ。此酒  
 此酒從來尋常ありて。人と湯を酒を。其風味の美き事。譬へ  
 づもの。辭退も作法も。忘も指の押。飲る。和尚と尚も  
 御食心。頻や酒を勧めけり。免七。斯異や。和尚が光  
 景と不審。今直物の酒と強る。様子。意の中  
 かつ十分の疑ひと。い。唯假。吞。若  
 車の。不圖腹の痛。生。  
 甚絶。免七。吞。和尚の  
 打笑ひ。途。余寒。感。却。熱。酒。  
 飲。速。愈。数度。取。勸。免七。唯腹を挿へて。



自が腹の痛むこと常るるをぞ沈痾る。暫時斯く在つる今忽ふ  
 愈るるうらま。面を臥く在けま各是と意もはる。俱々言投を免  
 七の更ふ飲さけり。残る四人と酒柑の醜る群る。蜜蜂の如く酒器と臺  
 盤で追取きた。汗面を臆せむ飲む元来人を害ふ為無く造る酒  
 ると其色の濃く醸さ美酒少く香味を加へ蒙汗薬と入してこれ  
 飲入直ふ四肢疹軟あろ昏迷とく忽泥爛る。土の舞足の踏所と  
 一わさ泣あり笑あり。頬あけり。雪言るもの更の正体多むけり。和尚  
 も此座の人々と飲食忘さふ此酒を飲むも自の兼てより。解酒湯と野へ  
 置く。度々房裡ふ入る。解毒を飲酒と吐ば饗食心方の僧等ゆら  
 更の障や無のい。本ま春の日の甚永き花より酒帰るを忘まそ。

日の西山傾けども現れく酒宴の果る光景の非ま見七の氣と  
 昔く速日申ふ及ぶ。旅舎まの遙けし。使は尚更深山路と夜  
 更越え人も物憂ふと思へて急なる。眠もりまかんと急責まる  
 各々の夢心地ま。雪の騷む答る人ぶ無り。和尚のゆき打笑ひ速  
 黄昏小程ちる。今更何處の越ゆる。斯る峻岨の深山路と深夜小越  
 往ゆるん。猪狼の左も右も此頃別く此より。山賊の群居る。往來の人と  
 剥取ら。風説もわらふ。危き道と往ん。あのまが寺院汗穢  
 とも。今夜も爰止宿る。明朝ゆくとま出ると。ゆが流石も見七の未  
 旅馴る御畏る。往先とも覚束ら。俱引く。詮方かく。  
 主が意の任せけり。頓く其日の暮過は。醉狂人等の正躰る。石と左

倒るまゝ和尚の其と潔淨なる。一間に寄る夜衣敷せむ。いざ各寐入  
 と。知方さすも起上りて皆口々大声のびて和尚が深志と賞あひつ。哭ひ  
 咲ひの東あ歪も西に倒れり。一歩の高く一歩の低く踏む。漸々  
 闕入りのまゝと夜も脱ぎ帯も緩む。其体倒れり。軒の雷の  
 如くや。前後も知を寝てけり。且説免七の衆共の房へ入りて。臥し  
 ども心中の大小和尚が為體と疑ひて。更眠る事与つて。密に耳を敲く  
 庫裡の光景を窺ふ。酒會畢く。後寂莫と人声なき。熟憶  
 ぬ斯も取乱し。覺忘の膳枕をとり納る様子も。何故ぬ斯人音も。  
 せむるおかしと愈不審何なるも子細を有らりと伺ひ居る。少時めて  
 窓の外に私人の歩行音と又何事と叫合の光景を。和尚も

疑ひと發して。居る一箇がいへく。彼若輩のさう勸まを酒と  
 飲する。吾黨の軟計する。事をも彼奴の悟りけん。と。和尚の声とく。  
 未黄口ある小童一個正氣の働くも。抑何程の夜と仕出さん。其も  
 怖る不足らむ。その声の風ゆきの折の三更の鐘響き。つと六時  
 九つ。ころも。渠等が酒氣の醒る中。事と果さんと口々い。金  
 驚く。は。七の大に驚き。酔る者等と馳動め。つ。様々ま  
 どの更入。一個も。ざる者。と。無のけ。渠等へ速く。粧ひ。庫裡の彼方  
 の杉戸と引のけ。既。此所の房の方。隣づ。味。つる。氣響。ま。今。免七  
 休。兼。詮。方。も。只。一個。道。ん。と。只。願。西。の方。長。押。の上。  
 窓。の。幸。いと。柱。と。使。打。登。戸。と。明。視。外。の方。庭。の。光。景

ぬきえし。其の間より漸々と身と聳うく。潜り出部とほひ外面の  
 方へ降りし。頃も二月すゑる。空を消残る月影の霞の中へ  
 封まき。と腫る影を透して。遺水の影少く流る。向  
 ひの方へ総へ。高垣と結廻し。越む。間もの。つらむ。と猶豫  
 不定。垣へ添ふる。掠の木の枝蔓。生ぬ。是幸いと躋上る。漸  
 う微く息を継ぐ。渠等のいふ。あつんと。後の方を顧み。今忍び。西  
 窓より臥く有る。房の中も明ぬ。其と入る。震ひく。覗て。あ  
 和尚と。悪黨等四五人。一様。黒き頭巾。面を覆。氷の  
 如きの刃を提は。各寝る。房の中へ。注。喬り。入る。え。言を  
 ぐぐ。片端より。大袈裟。小袈裟。車切。或の梨子。割空竹。割と。腕を任せ。

斬く。落し。中へ。和尚が声と。蛇の剣の斬味と。知ぬと。打  
 笑ふ。憐む。旅人等へ。飽ま。毒酒。酔る。吾と。忘。臥る。依。  
 不意輝く。剣の光。眼と。摺隙。あ。酔。臥る。其。閑。光。道。の  
 闇。間。さ。墮る。地獄寺の。露と。取。消。免。七。彼。大。樹。の  
 携。此。形。勢。を。顧。見。大。息。継。居。一。憶。火。急。迫。の。て。  
 是。迄。退。さ。る。と。廻。せ。口。惜。今。の。己。が。身。の。上。が。り。父。上。る。斯。  
 時。中。々。退。さ。る。武。士。の。子。が。ら。今。商。人。の。家。に。居。ま。せ。甲。斐。  
 る。意。と。成。る。か。も。親。の。友。と。見。捨。く。独。道。ま。え。と。信。の。義。の。背。  
 三。の。頭。引。返。俱。命。を。捨。人。あ。る。び。本。意。と。独。ら。ん。  
 身。と。離。く。既。此。方。の。度。の。面。へ。飛。降。し。又。顧。見。く。思。ふ。

中。新の悪黨等が手組の謀る中。得のもの持を只一個  
 走へるとも悪徒等と討得ん。難うめ。その俱め已ませ。不義の  
 渠等。力小保。身と果。もさ。小死。る者等が供養。成  
 命。詮。命を捨ん。身を全う。朋友の仇と報  
 ひく亡者等が死。暗け。得。本意。究め。

垣の外面と見下。入。月の味。莫。池。沼。と辨。と。

高垣の外。紛披。と飛降。此邊。總。水地。荆棘。の纏。叢中。

四肢。と突割。項。と損。血。面。流。凌。辛。

茨。と潜。歩。技。廣。野。夜。の鳥羽。王。の  
 聞。今。来。一。方。と不意。遙。臨。顧。野。踏。山。路。知。兵。少。

照。火。の光。三。四。五。燈。一。つ。合。て。別。分。又。打。寄。て。燃。る  
 ぬ。狐。火。の山。賤。が春。の野。諸。草。の萌。出。や。野。火。と。見  
 る。間。小。次。第。近。着。人。の。声。音。の。驚。さ。風。が。彼。小  
 童。と。討。渡。後。日。此。事。他。小。波。か。ん。頓。小。彼。奴。と。捕。め。開。け。

下。知。る。声。人。里。遠。き。廣。野。原。殊。更。深。夜。の。手。取。程。小。

見。七。再。び。驚。き。折。の。月。入。そ。殊。更。小。雨。微。降。目。刺。も  
 知。ぬ。聞。と。成。ぬ。往。た。何。処。も。知。る。道。と。果。人。里。の。

所。ま。と。足。不。任。せ。走。る。尚。往。前。を。望。愈。雲。低。く。地。黒。く。

北。風。頻。小。肌。を。徹。甚。物。凄。き。小。笹。原。茂。る。露。と。搔。分。け。身。を。濡。く  
 探。り。く。漂。り。往。速。踏。の。程。三。里。余。の。も。走。り。と。小。勞。と。

暫く疲と憩めんと探り足しと傍に這出一木の根尻懸く邊りと透して  
 只顧と見よと亡人の石碑の立並びたる墓原あり。見七熟々然るを。何処の  
 ひらぐ。斯る野中埋りて。朽果し身等したる。世に在るは  
 盛る。花の雫も本末と。貴き賤き隔りて。綺羅の衣も一色の香も  
 斯白骨と消失して。唯押並くむむと昔の露も外に采のありと無情  
 と感とく憩ふ折節前も彼所の高垣を越えそ茨の生茂り。中搦分  
 と道も来つと突つと細筋も流る血ののろろと昔を浸  
 して塚のころ。滴ると思ふと。戦吹風の小笹原吹く音も石碑  
 の陰より陰火照ると燃ゆると。焰の中も雲も霧も散々と白き衣  
 着。婦の姿丈も髪も面を隠し。打落る形勢も。差俯さく哭居

と見七見ると心怪し。斯る寒くは墓原も殊更夜深も唯一個  
 婦の居るべきやぞかきと。慮へば俄も身の毛於立走りんと。寒て  
 進むは。非るも吾と公と取直し。已も一個の丈夫あり。斯る節中を左も  
 右も狐狸の現も出いと様々の怪異と。ちと物ありと。思ひ替公定め  
 見返も野辺送りせし紙幡の空しく。墓原の風も靡き。颯々  
 と目も遮りぬのりける。白き意の迷ひと。思へば我も恥くと。独  
 ちらして往んと。よまば。燃ゆる陰火の陰も現も。女の姿。袂を  
 白も押も。唯さめくと哭居るも。見七も。怪み。震ひ戦も。魂  
 も。吾身も添ぬ。必地と。唯濛々と墓原も。躊躇は居り。けり。正是  
 今此處も現も。何る人の幽魂も。其も次の條も。審も説也



魂は袖を  
 託して免れ  
 小身の歿死  
 と譚る



第六回 柴の戸の燈火 迷ひ踏の片袖

且説免七の吾中のぬ心地。呻吟居る。彼婦の免七がイむ傍の  
 寄来り。ゆと細やうる声。そと。う俯き。ひひけ。自る。程近  
 井出の郷。任る者。ま。ゆり。七。年。以。前。の。今。日。の。夕。暮。法。師。の。為。し  
 井。小。墮。さ。ま。さ。か。う。り。身。の。果。る。庶。幾。井。出。の。住。む。自。母。子。の  
 此事。と。現。の。若。く。ぬ。へ。心。苦。さ。此。年。月。折。々。夢。ま。る。ま。る。と。世。の。人。の  
 其。と。ま。ま。悟。り。得。が。死。幻。の。世。の。本。と。現。の。言。解。便。宜。の。亡。靈。の。黄  
 泉。迷。ひ。く。年。経。ま。ど。所。縁。の。人。の。出。逢。ひ。の。公。火。と。燃。ま。の。言。で。過  
 め。恨。ま。ま。ま。ど。従。来。巧。の。法。師。の。今。世。誰。あ。ん。北。條。殿。由。縁。の。ま。ま。

渠が所為と大くの人の語ふ不意若火を引出し由々死事も成  
 らん。と待設ける今夜も所縁の君が此処と過りぬと知るまを  
 や見く一言を只願頼と参らせんと遙く遠き黄泉より。暫時の間を乞  
 受く。あまび沙女波も迷ひまの先より此処待倚りぬ自が母見が住庵の  
 門の一樹の柳樹あり。其と目標訪ひぬと若も疑ふ。ぬ此片  
 袖と刀をぬか。か。其と悟るべしと引ら。う。片袖と證と。て  
 与へは。又。あ。く。と。哭。く。免。七。の。怖。ろ。と。思。ひ。る。も。亡。靈。の。詞  
 とは。打。聞。け。所。由。と。何。知。も。唯。何。と。哀。傷。の。俱。ふ  
 涙。ふ。是。宣。の。何。人。の。辨。へ。ぬ。も。自。今。ま。難。出。合。く。何。声。の  
 御。も。辨。へ。走。る。牙。る。れ。此。ま。人。里。の。音。信。く。責。て。悪。を。と。人。

必訪ひて参らまへ。且宜か  
 事實も。いりある。いりある。いりある。光景の審み若参らせんと彼片  
 袖と受取り。此上も速迷ひを解く失ぬと佛の稱名を唱めよ。  
 阿那嬉とよの声と共に形は消失。吹動する夜嵐の音も幽かなる。  
 遠寺の鐘の声なり。耳の底を残りける。免七奇異の思ひを。  
 牙の流るるまじく汗のり。林の心地して頭を爰を走却か測る。  
 足の地も著せ宙と飛るる思ひの山路と見え方とさう。十四五丁も走り  
 ける。右の繁き森の中。灯火幽かなる。伏鉦の音の響る。  
 ぞ。斯る深山の尊く。行ひ澄ま桑門の何る法師の庵りと樹蔭入りの。  
 透る。門一本の柳樹を。教へ門をめと探る。つ至り

ろふ。甚少る枝折戸あり。軒傾き。柴の庵。唱名の声は。  
 左ま右ま免七の夜更。埜路や山路を走り。始漸く人家と。  
 ま心嬉しく。樞ふ寄。喧響つ。ひける。已の山路。踏迷ひ。旅人  
 候あり。哀情を賜り。今夜と明させ。老女の声と。  
 斯宜か何所より。過り。斯る山路。夜更。測り。  
 さ。無憂事。計知ま。此家の。婦人。の住居  
 夜。尚更。丈夫。門。明。暫。憩。ひ。面。臥。る。  
 庵。左。右。と。詮。ま。踏。の。四。五。丁。也。林。下。の。方。下。り。  
 宿。家。の。傍。り。其。所。暫。一。測。人。の。う。へ。辨。難。面。さ  
 老。女。の。あ。り。必。必。の。戸。牆。も。忽。び。免。七。門。戸。

虫物語卷三

十四



再裏のひいらふ。實の理と云はれども。余義の死事のことくを。  
 先門明く見えたる。かのまが淵より。跡なき。墓原のり。処と廻る。未  
 現知婦人に出逢ひく。是より禁下程近き。柳樹の元より。余々の庵に寄  
 斯々と傳へんと。此一品と證とあり。贈らまう。是れ見ゆる。左も右も。様子  
 の知る事。のやあうんと。いふ。老女の不審く。牖の戸引く。覗き。人色を。曉  
 近き有明の。朧月夜。其影。明。其と。知。ま。い。ど。年。九。年。未。足。ら。し。と。  
 見えぬ。様。の。艶。甲。の。旅。労。ま。あ。る。鹽。垂。く。門。の。樞。も。い。と。居。と。う。今。窓。明。  
 光景と見え。彼片袖と取出し。見。見。入。入。と。う。い。せ。老。女。の。心。驚。き。不。審  
 多。う。う。い。取。く。い。ま。い。女。が。前。年。井。井。墮。折。く。井。折。懸。り。く。残。り。有  
 一。人。見。え。の。あ。る。小。磯。が。片。袖。見。何。う。く。此。衣。と。今。客。人。の。お。も。い。と。い。免

七。こ。ま。い。て。も。其。お。寄。て。余。々。の。光。景。の。ま。ま。い。ひ。出。ま。い。先。々。此。方。へ。入  
 一。老。女。を。門。の。戸。頃。引。明。け。伴。ひ。つ。ま。い。免。七。の。内。の。光。景。と。見え  
 一。お。と。い。は。い。あ。る。と。と。覚。一。く。速。七。十。年。も。程。経。ぬ。と。う。支。離。ま。そ。老。女  
 老。女。と。年。の。二。八。の。程。も。い。ん。最。貴。の。艶。と。女。と。一。人。を。あ。る。と。い。免。七。が。長。押  
 一。振。の。薙。刀。の。一。形。勢。と。由。緒。あ。る。者。の。果。る。と。見。渡。し。い。お。あ。る。の  
 老。女。と。鹽。と。水。と。汲。と。く。泥。お。塗。ま。う。脚。と。確。が。せ。斯。る。賤。き。庵。が。う。脚。踏  
 の。ぐ。く。悠。悠。と。勞。と。憩。め。あ。う。と。地。爐。の。傍。お。花。筵。を。張。く。未。春。風。も。夜。も  
 寒。し。と。柴。折。く。と。暖。む。火。鉢。も。行。籠。も。い。ら。鍋。か。る。世。帯。の。自。在。鍵。操。下  
 一。何。が。か。と。い。は。る。中。の。赤。豆。粥。饗。養。心。が。い。の。門。う。赤。心。ぞ。あ。ま。なる。  
 免。七。答。へ。か。た。る。お。公。死。り。の。い。そ。と。い。つ。傍。お。坐。一。る。と。い。免。七。佛。回。し

種々の花と備へて薫くまふ香の煙の薄靡らる。げふ夜更通夜寢。  
 様子に佛ふ志すと忌日あるると思ひ居るふ老女の佛ふ物と捧げのひる様の  
 今夜も失ゆ女が七年のけが建夜おぼるるま不度幾ても旅人と。  
 止めく佛の甚言ともうまて死物と見えぬ通り女をりの住居をまて前の  
 ころお答へせと定めくころそむる死物と見えぬと見えぬ見七  
 答へくころと夜更其知ともおぼぬ遠け道と道まきなり  
 るころと甚困ト候ひ。諸亡者おぼえぬ。様子と斯と片袖と證お  
 とへ詞より。且古郷と打連づら神詣ゆとま出く。崖根の山路の経ある。  
 地獄らんとき分への地獄寺の難逢ひく不意も此処か道まき来  
 ず始終落も残らぬ語説ま。親子の等しく吐息へて驚とあがり片

袖と打返しはくまきわまの血汐の染みわくと。文字頭まき一首の歌有  
 かめてもくみくくまき山の井のわさやうか一人のあやうな  
 片瀬のうらまき此片袖の七年以前のけがの日小碇が果め傍る井桁  
 お掛ゆき有はると流石おのる物息と。殞せし折るふ共み埋ま  
 けり。其と證と今君ふとく介々憑き。正しく小碇が亡靈  
 ると。歎けが垂氷衆共み儲ると是迄母うへを自過るゆひく井お  
 墮やと卒ぬひと。事ハ碎事其と知せの歌のさなげふ兼く  
 ても浅ま死法師の身とて善なる死事と。あま。則彼僧の成せる  
 業より果ぬひ。其と知く。此年月過せけるの口惜さはま  
 其節父うへる信の品と。賜ひぬ。蛇丸の失う。も正しく渠が

仕業あつらん返すも彼僧を探し需めく父母の死を報を置か  
 らと奉と握り齒噛をか憤るる形勢と婦ふ容の粧まども流石  
 たるの壯夫の思ひぞ其と知るる。片瀬も涙と堰のへまけふ此事を  
 知るとんとき折々夢まふえつらん神あぬ月の悲一は斯とも知  
 ぐ過行いと。俱々免七も二人が情と思ひやりと。暫く涙ふまけるが  
 泪と拂ひく二人に向ひ心ねぢけ。其僧の面の容の如何ありと。回へを  
 片瀬もさまを其丈高く肥ふり眼圓か眉太く色白く青鬘  
 の年の二十年程過く左の眼尻か黒子ありといふ免七をばき其  
 てを慥に見ええの色か。かのみが朋輩を害ひ。彼地獄寺の住僧か決ま紛  
 まの有ま。自の武士の従者か生まるるま。や今利と専とま。

賈人か従か。も目前無差々々朋輩を失ひ。古御か帰るも口惜  
 其折く引返しく切死せんと思ひ。が乗等の大勢打連。得物を持る  
 其中ふ己一個の力め。走入と。詮る死事と。今此所を退き。二人も  
 朋輩の道と来つ。も彼等が讐を報んと。思ふ力及むと。話説出づるを  
 垂水せ。如何る神の引合せる。始る見ら。君あ。心の切を訪め。

奉ふ禮讓をの忘ま。回奉るも不禮を。弓矢の家か産ま。と宜  
 小詞ぞ憑。と奈何る氏のぬ。も斯く有る。名乗も面臥  
 事ると。鎌倉武士の果る。といふ免七中々か語。かまの嗚呼る。

かのま。父の下さぬ。仕へ。主君の彼鎌倉か。和田平太  
 長。忠義の武士か。北条殿の計らひ。空。罪を。

是れ人とな成ゆ。胤長君お仕へる。表太と呼び者の子あり。今  
 録倉の藍賣人張六と呼ぶ者の従者免七との人者あり。賤き者あて  
 うちりしとゆめり。親子諸共取携りて。涙あふ。偕も表太とゆめり。の  
 一に。胤長君の妻あり。小磯が母とくゆるり。是る女も主  
 君の忘し。世と憚ま。稚きより。是る山家お漸くと憂を  
 凌ぎてゆるり。免七大驚。頭お俯座を退き。偕も王君の  
 女君あり。ちりけり。禮義を礼。げ吾父の陸奥より。帰りて後お  
 語り。王君も斯く卒。おひ在柄の家も絶果る。伏若君君の在る  
 ちり。土民お父りても。蜜お君と取。家とを継せ奉。時節とてそ  
 待。其も公お任せ。と。往時内室の嫉妬お寄。何処も隔られ

小磯君お若君君へ在る。母と諸との話説。自。稚頃お斯  
 尋ねん便宜も。ト。母と諸との話説。自。稚頃お斯  
 ちり。山家お流魄。在る。此由故御  
 ちり。父お聞え。然。後お相談。彼。刀。探。得。誓。を  
 討せ奉。左。右。其。必。忍。び。待。心。短。く。ひ。集。も  
 今世お権柄。北条殿の員負。お法師と。笑。け。愁。る。事。仕。出。て。何。如。る  
 事。の。成。る。成。る。返。も。歸。来。く。再。び。僕。が。訪。ん  
 止。と。諫。る。垂。氷。が。誓。を。ゆ。め。り。一。途。お。怨。を。報。り。と。お。萌。の  
 頭。と。過。お。ん。ん。是。言。出。る。中。未。憑。く。ぞ。ん。え。お  
 け。斯。く。主。從。諸。ど。お。互。お。憂。を。語。り。合。ひ。歎。き。詫。が。春。の。夜。の。明。る

間速まゝに習なく。空そらろくくと横雲よこぐもが深山鳥みやまのとりの鳴なり。互たがひに名残なごりの惜あはれ。めど。免ゆるむ情なさけの急いそぐる。旅たび装まひり。片瀬かたせ垂氷たらしひの諸もろど。残のこる言こと扱あひ誓ちかしと控ひかゆる袂たもとより涙なみだの止とめ。暇いとま告つぐる。遠寺とほとほの鐘かねのびつち。中なか引ひくる。夜々よよの情なさけひさる。別わかる。頓とんと帰かへらん。足柄あしがらの其山踏そのやまをを力ちからめ。二人ふたりも門かど辺あたり。跡あとあり。返かへり。深山木みやまのきの間まも侘わびしと見送みおくる。現まる。隙ひま。後影あとかげ。歩あむ。消こ失えぬ。正ただ是し免ゆるむ。薄命うすなみだ。一ひと條ぢょうの話説わたりごとの絲口いとぐちを發はく。其そのと卷まと次ついでて説分わたり下くだ。

嫩髮蛇物語卷之三終

